平成２５年度研究成果報告書《平成25年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	2	都道府県・指定都市名	青森県
学校名（ふりがな）	国立大学法人弘前大学教育学部附属小学校（こくりつだいがくほうじんひろさきだいがくきょういくがくぶふぞくしょうがっこう）		
（児童数）	（６０６人）		

（本研究に係る問い合わせ先）

所在地：　〒０３６－８１５２　青森県弘前市学園町１－１
電話番号：　０１７２－３２－７２０２

研究内容等を掲載しているウェブサイトのURL：　http://siva.cc.hirosaki-u.ac.jp/fusyo/

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：２小学校
○研究対象教科等：　外国語活動
○研究のキーワード：　豊かなコミュニケーション能力，自己表現の場面設定の工夫
相手意識や目的意識，他教科等や行事に関連付けた単元構成
○研究成果のポイント：　単元構成・題材に子供の興味・関心を引く身近なものやコミュニケーションの必然性のあるものを選んで，他教科や行事に関連付けた。ゴールを明確にした場面設定を工夫したことにより，相手意識や目的意識をもち，相手に一生懸命自分の思いを伝えようとしたりする姿が見られた。

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題－

豊かなコミュニケーション能力を育てる英語活動
～自己表現をする場面設定の工夫を通して～

（２）研究主題設定の理由

自分の思いをもち積極的に表現することが苦手な子供が多い実態から，本研究は子供の豊かなコミュニケーション能力をはぐくむことを目的とする。「豊かなコミュニケーション能力」とは，子供が人まねでない自分の考えをもち表現したり，いろいろな人と積極的にかかわりながら協調性をもって相手を受容したりできる能力であるととらえた。そのためには，まず思いを持たせる場面設定の工夫が肝要である。子供の発達や関心にあった題材のもといろいろな人々とかかわり合う活動を取り入れることで，相手意識や目的意識をもち，子供が表現したくなると考える。このような活動の充実により，豊かなコミュニケーション能力を身につけることができるようになると考え，本研究主題を設定した。

（３）研究体制

弘前大学教育学部では，教育実践協同研究（略称：協同研）を置き，各教科等で研究を行っている。学部の英語関係の各研究室と主に小・中学校それぞれの英語活動研究部及び英語研究部により，英語教育の研究が進められている。定期的な協同研による研究会実施や指導案検討等により随時話し合える連携体制をとっている。

（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	○１年生から６年生までの他教科等・学校行事・日本の習慣・地域の行事など関連付けた場面設定を工夫した年間計画の作成（４月） ○１年生から６年生までの略案集作成 ○評価カードの見直し･作成（各単元のはじめ） ○公開研究発表会での学年の指導案集細案作成 ○国立教育政策研究担当者訪問（５月～６月）

	○公開研究発表会の実施・研究授業・研究協議会学部先生や地域の指導主事等より指導・助言を受ける（７月） ○上記公開研究発表会で受けた指摘より，研究主題や内容及び方法の見直し ○校内授業研究会の実施（１２月） ○英語活動アンケート（１月） ○平成２５年度研究成果およびアンケートのまとめ（２月～３月）

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

研究内容

①自分の思いをもち，進んで自己表現させるための単元構成や場面設定の工夫

②相手意識や目的意識をもたせたコミュニケーション活動の工夫

手立て

①他教科等や行事等と関連付けた単元構成・題材（子供の興味・関心を引く身近なものや自己表現するコミュニケーションの必然性のあるもの）を取り入れ，自己表現の方法を提示し時間を確保する。

実践例１　How to make a pancake.　パンケーキおすすめレシピ（５年家庭科）

実践例２　Where is the cake shop?　お助けマップに変身（３年社会科　道案内）

②相手意識や目的意識を明確にし，ペア活動やグループ活動を工夫して取り入れる。だれに何のために伝えるのか，何をゴールとして位置付けるのかを明確にする。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

・各学年の教科や行事等を，発達段階に応じた題材と関連付けて単元を構成することによって，自分の思いを伝えるための方法を工夫する姿が見られた。絵や言葉やジェスチャーを使って自己表現していた。

・ゴールを明確にした場面設定を工夫したことにより，相手意識や目的意識をもち，相手に一生懸命自分の思いを伝えようとしたり相手を理解しようとしたりする姿が見られた。

・一方的に自分のことを発信するだけでなく，相手との問答によって受け取った情報を再構成して相手に伝えるよう場面設定を工夫した。インフォメーションギャップを取り入れたことで，より相手のことをよく知るための質問を考えたり一生懸命聞き取ろうとしたりする姿が見られた。

・グループ活動を行う際に役割分担をしすぎたり，子供の自由な発話に任せてしまったりすると決まった子供だけが発話することがあった。そのため子供の自分の思いを自然に表出できる場面設定の工夫が必要である。

・実体験を通した他教科等との合科的な取り組みは，まだまだいろいろな教科等や場面で開発していける分野である。時間の確保や年間計画の見直しを図り学年に応じた無理のない語彙の選択が必要である。

（２）研究成果の意義等

・公開研究発表後，公立学校の外国語活動にも応用できるという意見を頂戴した。公立学校で行う際は，さらにHi,friends!との関連も考慮して年間のカリキュラムを作成していく一助となる。

（３）指定期間終了後の取組

・来年度の公開研究発表会にむけて，他教科等や行事との関連を図った年間計画の見直しや略案集を改善する。